

バトン

パス・ザ・バトン

4年 R・Hさん

「パス・ザ・バトン」という言葉が印象的だった。バトンをわたして、つないでいく。命には必ず終わりがあられるけれど、それでもつながっていくものがある。伝えたい想いや、大切なもの、そして命。この物語は、私につなげていくことの大切さを考えさせてくれた。

圭のおばあちゃんからゆずり受けた、大切なひな人形。でもハッサンのお母さんは、きみが悪いから返すようにと言う。母国で起こったイラン・イラク戦争で、たくさんの方の命がうばわれるのを見たお母さんは、人形を見てつらい気持ちを思い出してしまっていた。読んだとき、物語とテレビのニュース映像が重なった。今も世界では戦争をしている国があって、そこでは毎日たくさんの方が亡くなっている。小学校やデパートがごうげきされたニュースを見ると、自分と同じくらいの子供も傷ついていて悲しくなる。

以前、私は九十二さいの曾祖母から、日本での戦争の話を聞いた。となりの街にアメリカ軍の飛行機から、雨のように大量のばくだんが落とされるのを見たそうだ。日本は武器を作るための金属が不足して、家にある金属は全て回収されたため、タンスの取っ手まで外され、貧しく不自由な生活をしたと言っていた。私はその時、友達をみんな集めて曾祖母の話聞かせてあげたいと思った。その時代につらい思いをした人がたくさんいて、今の平和な時代につながっているのだということ。みんなにも知ってほしいと思ったからだ。

戦争を経験した人たちは高齢になっているので、聞いた話やその時の気持ちを、大切に後世につないでいかなくてはいけないと思う。私も友達に曾祖母の話を教えてあげたいし、友達からも他の人につなげてほしい。平和な世界をつくるため、何年経ってもこのつながりを終わらせてはいけない。そして、様々な困難があってもずっとつながってきた私の命を、大切にしていきたいと思う。